

首を回してテーブルのほうに顔を向ける。柔らかいくまのぬいぐるみの腹に潰された頬が左眼を開きにくくする。毛布は多少肩口がはだけているが、それ以外は無事身体を包んでいる。焦点の合わない視線をテーブルの上のノートに合わせる。よし、と意気込んでも、次第にはつきりとしていく脳内は、それにしても寒いと、今年一番寒いと、もう少し寝ようと、まだ大丈夫でしょ、清丸を睡眠へと誘う。やっと冬になったのだろうか、雪国育ちのくせに弱くなったものだ、清丸は起き上がりもせずノートに視線を固定して、起きるきっかけを待つ。犬の吠える声が聴こえたら起き上がる。子どもころはもつと寒かっただろう、これくらいの寒さで起き上がれないのか、いや疲れてるだけだ、ああ、そうか、その辺りから書いたらいいのか、そうひとつ思いつき、清丸はまた眼を瞑る。なぜかわからない、しかし書かなければならない、何ひとつ書き出しの糸口を見つけられぬままだったのに、ようやく今、清丸は、一筋光が見えた気がした。あとはきっかけ、犬じゃいつ吠えるかもわからない、猫が鳴いても、鳥が鳴いて

も、きつかけにして起きよう、清丸はそう妥協した。そのままの体勢でまた寝入り、はつと目覚め、待つてる場合じゃないと、大きな身体を起こした。あの寒い炭鉱街から書きはじめればいいんだと、ほどけた毛布の端と端を持つとまた目いっぱい、自身の身体にきつく巻きつけ、よし、ともう一度意気込み、数秒止まり、やはり怠惰に負けると、また横になる。くまのぬいぐるみはずれて頭の上にある。毛布の包まり方が完璧で、清丸は締め付けられる身体を芋虫のように丸めては伸ばし、店内の壁に面してあつらえられた長い長いソファの隅で、すぐ閉じてしまいそうな臉を堪えて開けて、くまの腹に顔を収める。店の外で鳥が鳴きはじめる。いやいや、さっきのはなし、やつぱり犬がいい、そう思いながら清丸は背もたれのほうに寝返りを打つ。起きたら書こう、昨日までとは違うぞ、いやでも書き出しの案がひとつ浮かんだだけにすぎない、そう思案のなかで行きつ戻りつしながら、すずめの声を聴いていた。